
夢への階段

雷神王

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢への階段

【Zコード】

Z0876E

【作者名】

雷神王

【あらすじ】

ある日主人公が公園で見かけた女性によって運命が切り開かれていく。。。夢とは何か？彼女が命をかけて守りたかったものとは何か。それを知るのは主人公だけ・・・

世の中には2種類の人間がいる。一つは夢へ夢へと走り続けその実現に努力する人間。もう一つは未来を考えず現実から田を背け今が楽しければそれでいい人間。

俺は後者の人間だ。だけど、かなわない夢なんか見てどうなる?どうせ一度きりの人生楽しまなきゃ損じやないか。

少なくとも今までそう考えていた。彼女に出逢うまでは・・・。初めて彼女を見たのはある晴れた日だった。炎天下の嫌な空気。誰もが下を向き少しでも太陽から逃れようと/orして中、彼女は公園の中であるで子供みたいに遊んでる。

もちろん最初は氣にもしなかった。だけど彼女は晴れた日は必ずこの公園ではしゃいでる。

そして俺はその姿を見ると何故か安心するんだ。理由は分からない、だけど無性に彼女を見たくて仕方ない。これが恋なのか?

そんな日が何日か続いたある日彼女が俺に話しかけてきた。

「君つてさ、最近よくこの公園にいるよね?もしかして引っ越しせてきたの?」

俺に気付いていたのか。だが俺はお前を見たくて来てるだけだとは言えないでの話を合わせる事にした。

「そりなんだ。じゃあ私がこの辺を案内してあげるよ」

おお、いきなりこの展開とは。まさか本当に脈ありか?

「公園を出てこっち行くとね図書館があるの。で、右に真っ直ぐ行くと美術館があるんだよ。それでね、それでね・・・」

なんか可愛いな、白く透き通った腕は枝のように細くて守つてあげたくなるタイプだな・・・。

「ねえ聞いてる?」

はつ、妄想に走ってしまった。俺の悪いくせだ。

「じゃあ私もう帰るね、バイバイ」

もう帰るのか、随分早いな

「あ、忘れてた私は桜井桃花って名前なの。よろしくね」最後に自己紹介かよ、まあ名前を聞けたからよしとするか

その日から何回か彼女と話をする機会があつた。彼女は子供の頃体があまり丈夫じゃなくて外に出られなかつたから外遊びを経験した事がなかつた。そして最近やつと外に出られるようになつたから毎日公園に来て遊んでるんだってさ。

「・・・ねえ、君は子供の時将来の夢つて何だつた？」

夢か・・・俺は夢を諦めた男だ。でも子供の時は夢があつたんだよな。いつからこいつなつちやつたんだろうか？

「私はね、鳥になりたかつたの。体が弱かつたから外の世界を自由に飛び回る鳥がうらやましかつた。」

鳥か、俺も鳥になりたかつたな。そうすればこんな面倒くさい世の中と離れて生きていけたのに。

そしてしばらくは一人で楽しい時間を過ごした。共に笑い、悩みを聞いたり言つたり、本当に乐しかつたんだ。それは恋人同士みたいに・・・

だけどある日俺は見つめられた。彼女が他の男とかなり親しげに話をしている所を！

・・・何だつたんだ俺は、只の暇潰しにしか過ぎなかつたのか？今までの世界が崩壊した気がした。もうここにはいられない。俺はステゴマダツタンダ・・・

そして俺は公園に行かなくなつた。あんな場所なんかもう嫌だ。吐き気がする。恋が破れた悔しさも大きいが、俺より親しい男がいたのももつと悔しかつた。独占欲が強いと思われてもいい。ただ俺だけを見ていてほしかつたのに・・・

2週間経つた。俺は仕事の関係で公園の近くに行かなければならなかつた。嫌だつたが仕方ない、近くを通つたら案の定彼女はいた。こちらに気付いたのか近付いてきた。

「久しぶりだね。風邪でも引いちやつたかと思つて心配しちやつた。でも大丈夫そうでひと安心だよ」

「何が心配だ…、どうせ今までも他の男と仲良くしてたんだろうがねえ?どうしたの?」

『・・・さい・』

「え?」

『うるさい!お前に何がわかる!他の男と仲良くしてたくせに心配してただと?笑わせるな!』

『…!ちがう、彼は…』

『あ~あ~。彼氏でございましたか。俺は遊びなんですね?一度と俺に近付かないでくれ!不愉快だ』

そこまで言つと俺は早足で彼女から遠のいた。正直これでよかつたのか分からぬ。だけどもう俺には関係ない話だ。

台風の季節がやつてきた。そのせいか最近は雨ばかりで嫌な気分になる。天気予報によれば異常気象で当分雨が降り続けるらしい。そしてまた仕事の関係で公園の近くに行くことになった。まあ、今日は雨だから彼女に会わずに済むのが唯一の救いではあるが。だが公園を通ろうとしたその時、ふと人影に気が付いた。こんな日に傘も差さずに人を探しているような感じだった。さすがに彼女なのかと焦つたが違つた。よく見ればあの時彼女と仲良くしてた男に似ている。

こつちが見ているのに気付いたらしく男が近付いてきた。そして俺の顔を見るなりいきなり殴つてきた。

『て、てめえ。何しやがる!』

『ふざけるな!貴様のせいで…』

『何を言つてやがる。このキガイ!』

「俺の妹の話だよ！桃花はなあ貴様に嫌われたのがショックで、一言でもいいから謝りたいって毎日ここで貴様を待っていたんだぞ！雨の日だってこの場所で…」

「…。そんな馬鹿な。俺はてっきりこいつが彼氏なのかと…。嘘だ。俺はとんでもない過ちをおかしたのか。

『…。それじゃあ彼女はどこだよ！』「桃花は…、肺炎で倒れて病院だ。俺はお前を許せない。この手で八つ裂きにしても物足りない…。」

俺は病院という言葉を聞いた途端走り出していた。彼女の掛かり付けの病院は聞いた事がある。今なら間に合うかも知れない！彼女に会つて心の底から過ちを謝らなければ！

どれくらい走り続けただろうか。ずぶ濡れになりながらも彼女がいるかもしれない病院へと到着した。

「ここにちは」

『ここに桜井桃花って患者はいないか？肺炎らしいんだ！』

「…少々お待ちください」

長い！普段の俺なら我慢できる時間なのに、何故か今は永遠の長さに感じる

受付で部屋番号を聞いた俺はすぐさま駆け出した。

部屋に入った俺を待っていたのは彼女の母親と医者だった。見た限りだと彼女は非常に危険な状態らしい。すぐさま母親が口を開いた。

「あなた。自分が何をしたか分かっているの？私の娘は、あなたのせいだ…」

言い返せない。俺はそれだけの事をした。つらく長い沈黙を破ったのは彼女だった

「…ねえ、母さん私は大丈夫だから…。それに…悪いのは彼じゃないよ。私が…嫌われるよう…な事をしたんだよ…。違う！俺のせいだ！俺が！俺が！」

「…。2人で話…させて…。」

医者は5分だけならと黙つて母親と共に部屋を出た

『「ごめん！俺が嫉妬されしなければ、こんな事には……』

「いいのよ……。それに最期に君に…会えて良かつた。・・ねえ気

付いてたかも…しれないけど私…君の事・・・・・・・・

おい、嘘だろ？なんで、なんでだよ！俺まだ好きだつて伝えてないよ…逝かないでくれよ。また一緒に公園で笑おうよ。ねえ何か喋つてよ・・・・

『「うわあああ――――!』

しばらく放心状態だつたらしい。彼女の母親に肩を叩かれ我に返つた。

「桃花が言つてたわ。私が死んでも彼を恨まないでねつて」

最後の最後まで俺に気を使わせまいとしたのか・・・

「すぐには無理かもしれない、でも桃花の遺言を無下にするわけにもいかないわ。だから・・・桃花の分まで生きてください」

そう言うと彼女の母は泣きながら帰つていった。

人の分まで生きる・・。こんなに重くて苦しいものなのか。

・・・いや彼女は鳥になつただけで。今頃どこか遠くの空で・・・

遠くの空で自由を求めて元気に羽ばたいてるさ。

台風シーズンは過ぎ、だいぶ秋らしくなつてきた。俺は久しぶりに公園に行つてみた。

そういうえばここで夢の話をしたな。桃花ちゃん、あの時俺には夢がなかつたけど今はちゃんとあるよ。それは君と結婚する事、簡単じやないけどいつかきっと会いに行くよ。

秋の風が頬を撫でた時、いつまでも待つてると聞こえた気がした。

(後書き)

初めて書いた小説です。至らない所ばかりだと思いますが、よろしくお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0876e/>

夢への階段

2010年12月24日02時58分発行